

## ■はじめに

校長の皆さんこんにちは。「年々歳々 花相似たり、歳々年々 人同じからず」といいますが、今年も、小学校 13 名、中学校 6 名の合計 19 名の新しい校長先生が誕生されました。皆さんと一緒に、奈良市の子どもたちのために同じ方向を向いて頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



## ■新規採用教員の着任式にて



4 月 1 日に新規採用教員の着任式をさせていただきました。小学校 37 名、中学校 22 名の合計 59 名が既に教育現場で勤務しております。着任式では、「2011 年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの約 65%が大学卒業時に、今は存在していない職業に就く」という話や「現在ある 702

の職種のうち約 47%が 10 年から 20 年後にはコンピュータにとって代わられる、また、教員もなくなる職種に含まれる」という話を挙げ、子どもたちが生きる未来は国境を取りはらわれた、先の見えない正解がない激動社会であるけれども、その中をしっかりと歩んでいく子どもたちを育ててほしいと話しました。

そのような世界を歩んでいく子どもたちにどのような力をつけたいかということですが、「誰とでもコミュニケーションをとれる力」や、先ほど述べた「正解のない先の見えない世界であっても、果敢に挑戦していく突破力」、あるいは「誰かからの指示を待つのではなく、自ら課題を見つけ解決していく力」、そんな力が必要でないかと新任の先生方に話しました。

## ■ISAK (アイザック) の視察から

今の職業が殆ど消える時代を生き抜く子どもたちにどのような力をつけさせなければならないのが話題になっていますが、今日本では新しい学校が注目を浴びています。

皆さん、「ISAK」を知っていますか。「インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢」という学校の略称です。この学校は「アジア太平洋地域そしてグローバル社会のために、新たなフロンティアを創り出すチェンジメーカーを育てます。」というミッションを掲げ、昨年 8 月 24 日に開校されました。

## 子どもに付けたい3つの力

- ① 多様性の中で相手を尊重し、活かす力
- ② 課題を発見し解決していく力(デザイン思考)
- ③ 困難にも打ち勝つ力



この学校は小林りんさんという方が設立されました。この方は、ユニセフのプログラムオフィサーとしてフィリピンでストリートチルドレンの非公式教育に関わっておられました。その時に圧倒的な社会格差を目の当たりにして、リーダーシップを育てる教育の必要性を痛感し、ISAK設立に向けての活動を開始されました。

先日、私は ISAK を視察する機会をいただきました。私も一度は訪れたいと思っていたので、念願が叶い大変嬉しく思いました。小林さんが考える「新しい教育で子どもたちにつけたい3つの力」に私は注目しています。

まず1つ目は、「多様性の中で相手を尊重し、活かす力」。ISAKは全寮制の高等学校ですので、多様なものを受け入れないと生活できないという環境に否が応でも置かれます。そして子ども同士で話し合いルール決め、自分たちの宿舎を運営していくと言います。

2つ目は、「課題を発見し、解決していく力」。小林さんは「デザイン思考」とおっしゃっています。課題は与えられて解決するのではなく、自らが課題を発見することに重きをおいて、チームで協働して解決していくという意味です。

3つ目は、「困難にも打ち勝つ力」「失敗を恐れず行動する力」です。このあたりは「世の中を作っていくチェンジメーカーを育てる」という ISAK の目標と合致していますが、公教育が目指す子ども像とは少し違うかもしれません。しかし、今は存在しない職業に就き、多様な価値観を持った人と共に暮らし、一緒に仕事をするようになる社会が間もなく訪れてくる、いや既に訪れているのかもしれません。そんな時代に、ISAK が子どもたちに求めている力というのは、決して私達ともかけ離れていないと思います。

ただ、いろいろな会話をする中で、小林さんは「カリキュラムを変えても教育は変わらない。」「いくらアクティブラーニングを唱えても、教員の質が向上しなければ、ゆとり教育のようになるだけだ。」「私達の学校もそうですが、公立学校ももっとクリエイティブにならないといけないのではないですか。」「とおっしゃっていました。正解のない社会の中で、最適解を求めていく力をつけるのには、やはりその時代をしっかりと見抜き、たくましく歩んで行く力を子どもたちにつけなければなりません。そのためには、教員を変えていく必要があると強く思いました。

「教えるのは、本当に教員でいいのか。教員は何をするのか。」という問い掛けもされました。タブレットの時代に入った今、教員の役割が一斉授業で知識を注入するままでいいのか、教員の役割が変わっていく必要があるのではないかということです。「教員は企業に勤めたことがないのだから、教員はキャリア教育をあきらめて、地域の人に任せたらいいのではないか。」というようなこともおっしゃっていました。また、一方で「忙しすぎる教員に時間を与え、教員が頑張れる環境をつくる。」例えば、部活動も3校で1つの部活動をする

という方法があってもいいのではということもおっしゃっていました。

## ■「断捨離」

さて、3月にも話しましたが、奈良市教育委員会は奈良市の教員の多忙さの実態を知るために2年間かけて調査を行いました。実態調査の結果では、国・県・市が実施するあらゆる「アンケートや調査・報告」は意義が感じられず、時間的負担が多いと先生方が感じていることが明らかになりました。また、中学校教員の結果では、意義は感じるが、負担が多い業務に「部活動指導」が挙げられています。

多忙さの実態だけではなく、奈良市の教員の意識と職務の実態を把握するためのアンケートも行いました。このアンケート結果では21世紀型スキルや、グローバル人材の育成といったこれからの社会で必要とされる能力の向上に関心のある先生方が半分弱の割合でしかないことが分かりました。このような学校現場の実態から、まず先生方に子どもたちと向き合う時間を確保していただき、研修についても、より充実した中身にしていく。このような考え方を原点として先生方の意識を変えることで、授業を変え、子どもの学びを変えて

いきたいと考えています。

そのために、まず「断捨離」です。実態調査から明らかとなった多忙化の要因を見直し、先生方の時間的・精神的余裕を生み出そうというものです。「断」としましては、雑務を断つ。先生方の仕事に「雑務」があるとは思っていませんが、教育委員会から先生方をお願いしている報告や回答など、一緒にできるものはまとめてしま



おう、というものです。これは、プロジェクトチームを立ち上げ、この一年をかけてまとめていきたいと考えています。

「捨」につきましては、これは学校の中の見直しのことです。例えば「会議の見直し」が挙げられます。似たような会議をまとめたり、会議の時間を区切ったり、ノー残業デーを設定してみる。職員朝礼を曜日によってなくしている学校もあると聞いています。学校の現状にあわせた工夫で余裕を生み出してほしいと思います。

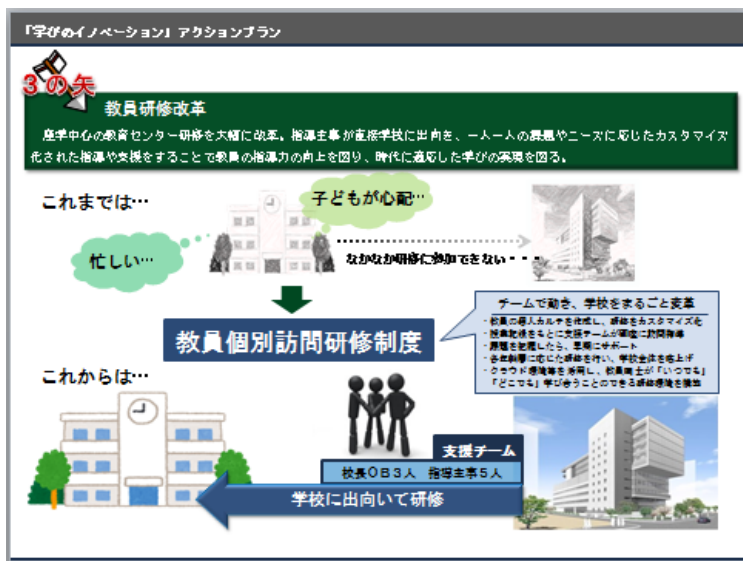
「離」は中学校の部活動についてです。先生方を部活動から少しでも解放しようというものです。しっかりと子どもたちと向き合う時間を確保できるように部活動指導の支援を進めていきます。

しかし、断捨離だけでは、先生方の子どもたちに向き合う時間が確保できません。そこで学校を支える仕組みを構築しました。学校取り巻く環境が複雑で困難になってきている中

で、先生方が授業や子どもたちの指導に専念できるように、教育委員会事務局内で教員 OB などによるサポートチームを組織し、学校を支援していくという仕組みです。いくつかの新しい取組について話したいと思います。

まず、教頭事務補助チームです。教員 OB ではなく、市の行政職員 OB が学校で勤務し、教頭の事務補助を行います。今年度は平城中学校、若草中学校、京西中学校、平城小学校、六条小学校、佐保川小学校の 6 校に導入しています。

次に、学校応援サポートチームです。市や学校管理職の OB を再任用し、部活動支援担当や、虐待・生活支援担当、学校運営担当、施設整備担当、情報管理担当など、それぞれの担当の業務を行ってもらうというものです。緊急な対応を要する時には全員がチームとして動きます。



そして 3 つ目は教員研修改革です。教育センターで研修をしていましたが、一斉に行う座学中心の講座ではなく、指導主事が学校に出向き、先生の一日に密着し、そこから見えてきた課題をその場で共有し、改善策を一緒に考え、教員個々のニーズやライフステージに応じてカスタマイズした研修をその場で提供するので、ここ

でも指導主事だけではなく校長 OB の先生方の力を借りて、8 人の支援室チームを結成し、動いていただく予定です。この対象となるのは、今年度は、小学校の若手の先生を中心に考えています。また、教育センターで行う研修につきましても、初任者研修や 10 年研修の講座数を減らします。単に数を減らすだけでなく、先ほどの訪問研修やクラウド環境を活用した研修を推進していくことで研修の質を維持・向上しながら効率化を図っていきたいと思います。

## ■おわりに

国では今年から、新しい教育委員会制度がスタートします。奈良市でも大きく舵を切ろうとしています。私達は本年度を教育改革の元年と位置づけて進めていきたいと考えています。校長先生方が私達と意思を共有し、学校でリーダーシップを発揮することで、同じ方向を向いて進んでいけるようお願いします。